

家庭—保育所—幼稚園

# 幼児の教育



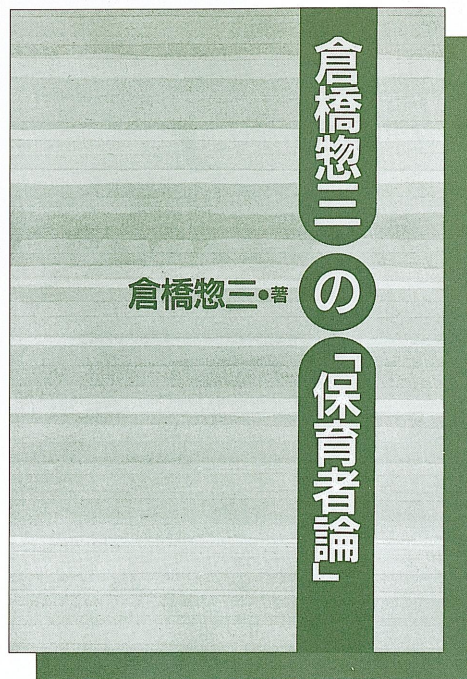
'993



# 倉橋惣三の「保育者論」

好評既刊本！

発売中



倉橋惣三・著

倉橋惣三が折にふれ書きとめた

「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。

倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。

これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を  
よりよいものにしたいと考えている

幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

B 6 変型判 200頁 定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育

第98巻 第3号



# 幼 児 の 教 育 目 次

——第九十八卷 第三号——

© 1999  
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

巻頭言 望ましい保育施設の在り方を考える

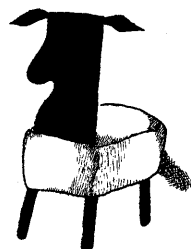
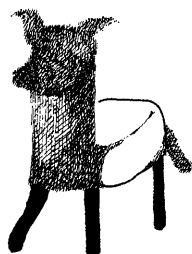
——大人の立場と子どもの立場——……………森上 史朗…(6)

ある日の育児日記から(98)……………佐藤 和代…(9)

「観る」という行為に潜んでいた私の感情……………田代 和美…(10)

ある秋の午後……………中村 妙子…(16)

「児童の世紀」を振り返る——その十二——……………本田 和子…(22)



幼児期にのぞみ見るものは生涯につながる

——「すてきにするの」再考——……………津守 真…(31)

歴史の中の保育に学ぶ(一)

志賀志那人の大阪北市民館保育組合から……………福元真由美…(36)

子どものいる暮らし——男・夫・父

単身赴任者の子育て便り……………岩立志津夫…(44)

過去と現在の間……………山本 政人…(51)

遊びへの関わり……………高橋 陽子…(58)

表紙絵／北村 俊道

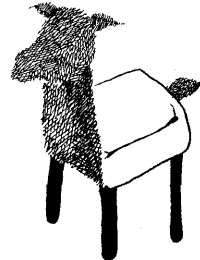
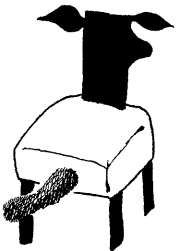
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「椅子」

編集委員／田代 和美・上坂元絵里・吉岡 晶子・田中三保子

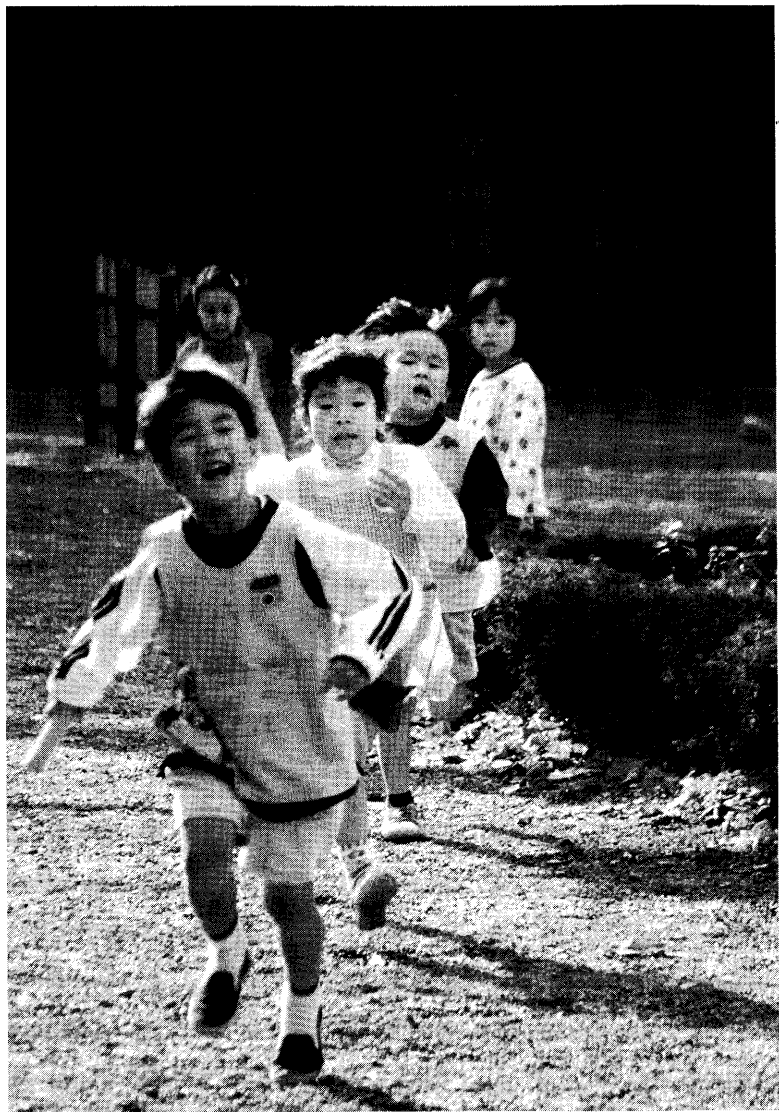
編集部／仲 明子



# ある日

撮影・平野 清





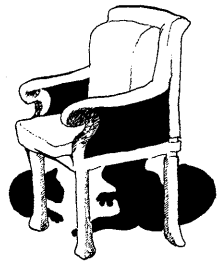
## 巻頭言

# 望ましい保育施設の

## 在り方を考える

—大人の立場と子どもの立場—

森上 史朗



今、時代の変化の中で政治・経済・教育などあらゆる分野で大きな変革が進んでいる。保育もその例外ではない。たとえば保育制度についていえば、これまで幼稚園と保育所はそれぞれの果たすべき役割が異なるというこ

とで、多少でも制度と違った運営を行っている保育施設に対しては、行政管理庁・文部省・厚生省などから強くその是正が求められていた。しかし、最近では規制緩和と自由化の動きの中で、保育施設も地域の実情に即し



て、独自の在り方を構想してよいということになり、今、各地で幼保一体化施設が増加しつつある。また、幼稚園で、正規の保育時間をこえた「預かり保育」や、一・二歳児などの未就園児を受け入れて保育をするなど、「幼稚園の保育所化」が進行しつつある。

そうした動向の中で保育所の不足を幼稚園の空き保育室で代替しようとする「横浜方式」などがマスコミの注目を浴びている。

また、幼稚園の保育所化に関して、これは家庭教育の崩壊につながるとして反対する動きもある。これとは別に幼稚園は保育所とは違って、学校教育を施す教育機関であるとして、幼稚園の学校化を推進しようとする「幼児学校構想」も登場してきている。

一方、地方自治体では財政の効率化の視点から保育施設の統廃合を推進しようとした

り、公立施設の民営化を図ろうとする動きが各地で出てきている。さらに、保育者の非常勤化の動きもあり、先日筆者が訪れた市では保育所の正規職員は三分の一であり、三分の二は嘱託職員で五年を限度に退職する規定となっていた。

筆者も国が一律に保育施設の在り方を決めることには反対であり、それぞれの地域の実情や子どもの生活の実態をとらえて、それぞれの園がもつとも子どもに即した保育を創造するということは重要であると考えている。しかし、そのためにはいくつかの前提を必要とするように思う。すなわち、保育施設の在り方を構想する人たちが経営の効率化や園児集め、保護者の要求といった視点だけではなく、乳幼児の発達の特性やそれにもとづく保育の本質、その仕事に携わる人の専門性につ



いて、十分に理解があることが必要である。

そうした点では、筆者が多く行政担当者や保育施設の長といわれる人たちと接していて、それらの人たちが、〃保育の専門性〃を非常に軽視して、いわゆる〃自称専門家〃として自信をもつて次々に大胆な改革の構想を述べられるのに大きな危惧をいただいている。これは、保育を狭いカプセルの中に閉じこめて、外からの発想を拒否せよということをいつているのではない。乳幼児の発達の特性や保育の本質から目をそらさないようにしながら、異なった分野の人たちとも交流し、絶えず保育を開かれたものにしていくことも必要と考える。

一般的に言つて、望ましい保育施設を構想する際に、①行政の立場、②保育施設の立場、③保護者の立場、④保育者の立場、⑤乳

幼児の立場の五つがあげられる。それぞれの立場が一致すればよいのだが、それは、たいていくい違うものである。

最近の保育施設の在り方についてのさまざまな構想を見ると乳幼児の立場に立った発言が最も弱いように思われる。そのことが今、われわれに最も求められていることではないかと思う。

(青山学院大学)

## ある日の育児日記から

(99)

佐藤 和代



ついで覚え、有は本と首っ引きで。有のあやとりは、説明書を見ながらプラモデルを組み立てているときのようであってしまいます。こいつ、マニユアル読んでから家電使うタイプだ…。

有がこの頃、あやとりにこっています。圭はあやとりが大好きで、年長さんの頃「あやとり名人」と言われたほどでしたけど、有は男の子だしやらないだろう…と思い込んで、教えもしなかったのです。それなのに、いつの間にか自分で本を見て覚えて、私の知らないものまで作れるようになってしまいました。

る年配の女性がいるのです。長距離の電車では「今はそうやってやるのねえ。おばさんの頃は違ったのよ」と話しかけられたりします。しばし知らないおばさんと一緒にあやとり遊び。退屈しないですんで、ついにおにぎりやみかんをいただいたりして、親は大助かり。ゲームボーイではこうはいかないわよ。ところであやとりの覚え方も、性格の差って出るものですね。圭は誰にでも「教えて」とまとわり



こういうオリジナルもある。

# 「観る」という行為に

## 潜んでいた私の感情

田代 和美

夏休み前にA男のことが話題になる園内研究のために、ある園で観察をした。その日のA男は行動を共にすることが多いB男を含めて五人で砂場で遊んでいた。遠目から見ると盛り上がりつつ遊んでいるように見えるその場の中で、A男は（私から見れば）C男に対して執拗な言葉での暴力を繰り返していた（たとえば「四人で考えるんだ、C男はだめ、C男は嫌いなのだ」）。その場を見ている私には、そのような言葉の発せられる因果関係が全く分からなかった。遊びの流れとは無関係に言葉は発せられていた。急に「C男なんかもう遊ばない」というと、それを受けてB男が「C男、もう



入れてあげないことにする？」とお伺いを立てるように言う。それを受けてA男は、急にやさしい声で「みんなそう言うんだっただらそうする。僕もみんなと同じ」と言う。「ね、じゃあ今度、虫取りしよう、みんなで」とB男が言うとすかさずA男が「C男は見るだけ、C男がいるとねえ……？（聞き取れず）でかわいそうでしょ、ちようちよたち」などと言う。

第三者という立場で観察し、その後保育者と一緒に考える機会がある場合に、どのような視点で観察するのかということを意識はしてきた。観察者が保育者と違うのは、それまでの日々の生活の流れを知らないことである。しかし保育をしない分、観察している時間内での出来事はじっくり見ることができる。だから丁寧に見てみよう。それに加えて私自身の中で意識してきたことは、子どもの行為を肯定的に促えようということだった。

しかし前記のような場面を観察・記録しているプロセスで様々な疑問が私の中に湧き出て渦巻いていた。もくもくと水をくんでいるC男に、A男はどうしてこのようなことを言うのだろう。C男はどうして反論したり向かっていたりしないのだろう。A男とB男の関係も理解できない。B男はなぜA男にお伺いを立てるような言動をするのだろうか……。怒りとしか言いような感情が湧く一方で、子どもの行為を



肯定的に促えたいと意識しているのにもかかわらず、否定的にしか見られていない自分自身の促え方にジレンマを感じ続けていた。

観察した後に、もう六年も前になるが、やはり同じ様な状況でジレンマに陥った自分がいたことを思い出していた。今以上に保育のことが分からない自分が、それでも呼ばれるままに保育現場に行き始めた頃のことだ。その日の私は、担任が気になっていいるD子を見ていた。D子はE子と二人でままごとをして遊んでいた。その遊びの中では「はい朝ですよ、起きなさい」「ご飯を食べなさい」「もう夜よ、寝なさい」などE子が一方的にD子に指示し、D子はひたすら言われるままに動いている……その繰り返しが続々と続いていた。その場面を見ていた私は、その二人の関係を肯定的に見ることができなかった。その後の園内研究の話し合いの中でD子の話題になった時、D子のためには二人の関係を離れた方が良いのではないかという方向に話が進み、私も何となくもやもやとはしていたが積極的に異論を唱えられなかった。いやそこでの保育者と私の関係を考えると、私がそのような方向性で発言をしたからそう進んでいったのだと思う。しかし園内研究が終わった後でも私の中では何か釈然としないまま、そのことが引っかかっていた。そのため後日、改めてその園に行かせてもらった。すると私が見に行ったということもあったのかもしれないが、保育者は意図的に



二人を引き離そうとしてD子と一緒に遊び、クラスの中でE子の居場所がなくなっていて愕然としてしまった。その日の保育の後、担任と話しながら、私自身が二人のあり様を肯定的に見られなかったことを反省し、それを伝えた。そして第三者として観察をする時には、今、その子にとって何が大事なのか、何がその子を支えているのかを含めて現在の子どもの姿を大切に、肯定的に促える視点を持つとうと決めたのだ。

その六年前の失敗があるから、そしてそれ以後子ども今のあり様を肯定的に見ようといがけていただけにA男の姿を肯定的に見られない自分が情けなく思えた。理性和感情が分裂し、感情が優位に立っていた。しかし一度感情が優位に立つと、なかなかそのことから離れられなくなる。私はどのように話し合いに臨んでいいのかわからないままに臨むことになった。

話し合いの中では、A男の日頃の様々な姿が語られたが、その中である保育者が全く違う場面でのA男の姿について次のような話をした。その保育者は、ある時A男を含めた五人の男児が危ない場所であうちよを採ろうとしていたので、他の場所に移るように伝えた。すると他の子どもたちは決まり悪そうにそこを離れてちようちよを追い続けたが、A男は「ここにしかいねえよ。もっと探せよ」などといって動か



かった。そのうち、ただ追いかけていても捕まらないので「網みたいの作ってこよう」と他の子どもたちは保育室に戻ったのだが、A男は「俺は行かない。俺のも作って来いよな」などと言いながらその場で待っていた。その間A男は「セロテープのあるところわかんねえのかよ」などとぶつぶつ文句を言い続けて待っていたが、みんなはなかなか戻ってこないで、結局最後にはその場を離れたという。その姿を通してA男の空強がりとその裏の弱さが見えること。何とかしてみんなの中に自分を位置づけたいが、どうしてもできない。そしてそれが悔しくてしょうがないこと。口では大将気取りなんだけど大将にはなれないこと。他の子どもたちのように遊びのイメージにすーっと入り込めずに乗り遅れることなどのA男の姿に関する読みとりが語られた。

この話を聞いて、観察していた場面でのA男の行為を読みとる視点が私の中で急変した。自信がなく、遊びのイメージについていけない中で他児を排しでもしないと安心して存在できないA男の姿が浮かんできた。これも一つの読みとりの視点にすぎない。しかしこれによって私自身はとてほっとしたのである。ようやくA男に感情移入できた。弱い部分をもつ存在として見えてくると感情移入できるのが私の特徴のようだ。感情移入できずに、批判的に見ていた目から寄り添える方向に変わっていく。感情に支配されるか、それから解き放たれて考えることができるのかの分岐点はその子どもに感情移入できるかどうかにある。私の場合は弱い立場・つらい立場には感情



移入できても、人を排除したり・否定する場合には感情移入できにくい。対子ども（対等であるべきと思っている関係）に関しては、妙に正義感が働くようだ。人を理由もなく（少なくともその時点ではそう見えた）否定したり排除してはならないという埋め込まれた倫理意識が彼に対する私の怒りの感情の根柢にあるのかもしれない。いやもつと根本的には、人から支配されたくないという私自身の感情があるのだと思う。だから支配されている（ように見える）側に必要以上に感情移入してしまうのだろう。その感情はその子どもの感情以上に私の支配されたくないという感情なのだと思う。頭で肯定的に見なくてはと思いついていても、それだけでは感情の部分はコントロールできてはいない。だから六年を経て再び同じジレンマに陥ったのだろう。自分の中に生じてくる感情の中身が見えてきて初めて、それはコントロールできるのかもしれない。保育者と違って日々の生活の中で子どもを継続的に見ていない分、観察者として子どもの行為を観る時の自分の視点を吟味していかないと、自分自身の感情を混同した状態で子どもを見ていることは結構ありそうだ。

（お茶の水女子大学）



## ある秋の午後

中村 妙子

『エミリー先生』というイギリスの小説があります。原題をEmily Daviesといいます。作者のミス・リードの本名はミセス・ドーラ・セイント。八十歳をこえた現在も作家活動を続けておられます。その作品は南英の丘陵地方の村に住む、作者と同じミス・リードという名の女教師を通じて語られる、物語の形のエデュケーション論でもあります。『エミ

リー先生』はそうした主流からいうと、いわば番外篇とでもいいましょうか。これには直接にはミス・リードは登場しません。

ピーチグリーンンの村のコテージに住むエミリー先生が亡くなりました。眠っているあいだに天国に召されたといったような平和な寝姿でした。さまざまな人の思い出が語られます。ユーモアに

富んでいた、強い、けれどもやさしい先生に手向ける、心のこもる言葉の花の数々です。

まずエミリー・デーヴィスと晩年をいっしょに暮らしたドリー・クレアが初めてエミリーに会った少女の日を回想する一章があります。転校生のドリーがエミリーの隣の席にすわり、その日から生涯にわたる友情の絆が結ばれたのでした。

二人は成長すると揃って教職につくことを希望し、学校こそ違いますが、子どもたちとの毎日とともに喜びを見出します。やがて第一次大戦が起こり、その間接の結果として二人は愛する者を失うという痛い経験をします。ドリーの場合は相手の男性による婚約の破棄によって。

この物語の終わりに近く、村の学校から隣町の高校に進み、卒業後、ロンドンの秘書学校を経てタイピストとして働いているスーザンという若い娘が母親からの電話でエミリー先生が亡くなった

と聞かされ、幼いころの思い出にふける二章があります。

スーザンはロンドンのフラットで四人の娘と共同生活を送っているのですが、掃除も、料理もする気のない友達との殺風景な生活に疲れて、故郷の村の空が、田園の風光がなつかしく思い出される朝夕でした。

家が学校の近くだったので、スーザンはエミリー先生とは学校に通うようになる前から顔馴染みだったので、五歳で幼児学級に入学しました。入って早々、麻疹にかかって三か月ほど休んだので、ふたたび登校できるようになったのはやっとクリスマス休暇の後でした。

二月のある晴れた日、エミリー先生は幼児学級の子どもたちを引率して、近くのアレン農場に群生しているスノードロップを見に行きました。

スーザンはこんなにたくさんさんのスノードロップ

を見るのは初めてでした。雪のように白い小さな花がそつと頭を垂れている様子はなんとも可憐で、朝日の光を受けて透きとおるようでした。

母屋と裏庭を区切っている生け垣の背後に何頭もの子牛が毛のモジャモジャした頭をかしげて、睫毛に濃く縁取られている目でまじまじと子どもたちを見ていました。ぬれた鼻面から鼻息が水蒸気のように立ち上っていました。母屋のかげの塚の上に立つて遠くに目をやって、スーザンは思わず息を吞みました。なんて広いのかしら！

そのとき、子どもたちに気づいたのでしょうか、農場の飼い犬が丘の斜面をまっしぐらにこちらに向かって走りだしました。初めのうちは黒い塊が動いているに過ぎなかったのですが、近づくにつれて犬の伸びやかな四肢の整合運動に、スーザンは快い戦慄を覚えはじめました。前足をサラブレットのように誇らかにグッと伸ばし、後ろ足で

大地を蹴って、犬はその距離をまたたく間に縮めていました。耳がパタパタと揺れ、笑っているように歯をむき出していました。生の横溢を絵に描いたようなその姿が、病後間もないスーザンの心を強く揺さぶっていたのでした。

母屋のキッチンの白木の大きなテーブルの上には、湯気の立つミルクの入ったブルーの水さしが二つと、色とりどり、大きさも形もさまざまなマグカップがいくつも並んでいました。ジンジャー・ビスケットを山盛りにした、黄色い陶器のボウルも出ていました。

子どもたちの声のあふれる、居心地のよいキッチンと、戸外の果てしない空間とのコントラストを、スーザンは強く意識していました。家庭の暖かさ、そして外にひろがる無限の空間。肉体的な疲労のせいでもより感じやすくなっていたのかもしれませんが。スーザンは黙ってすわって、言

い知れぬ満足感にひたっていました。

帰りぎわにスーザンはミセス・アレンの堂々たる腰のまわりに両腕を回して、思いきり抱きしめました。

帰り道、疲れて歩けなくなったスーザンをエミリー先生がおぶってくれました。ほったたを好みな先生の赤いコートに寄せ、先生の背に揺られて進む快さ。見回すと友だちがめいめい小さな花束を大事そうに握って、ゴツイブーツをはいた足を運んでいました。みんなの吐く息が水蒸気のように立ち上り、あの子牛たちのことが思い出されました。

スーザンはその日のことを、エミリー先生の暖かい背中との感触とともに忘れられませんでした。

ロンドンのフラットの、脂でねっとりしているようなガラス窓の前に立って、スーザンは思ったのです。どんな子どもだって、いえ、大人

だって、息のつまるような、こんな不潔な環境で暮らすべきじゃないわ。

スノードロップの思い出、エミリー先生の思い出、子牛たち、そして彼らのモジャモジャした頭の向こうに見はるかされた丘陵。あの世界に、わたしという人間の根つこのあるところにもどって行って、何がわるいの？

故郷の村に帰れば、二つの世界は併存しているのだ。居心地のよい、暖かいわが家と、無限の広さをもつ自然とが。わたしは自分の肌に合わない生活が無理やり、自分に課してきた。本当



の自分を発見するために、今のわたしには広い空間と、新鮮な空気と、人のぬくもりが必要ではないのかしら？

誰からも愛されていたエミリー先生の力の秘密は、それだったのかもしれない——そうスーザンは思いめぐらしていました。エミリー先生はいつも自分のペースで歩いていました。どんなに忙しくても、どんなに辛いことがあっても、まわりの自然の風物を味わい、その喜びを生徒たちに伝える余裕を持っていました。曇りない、晴れやかな心によって培われた彼女の幸福——それは時に応じて、幼い者、力弱い者に惜しみなく分かちあたえられてきました。エミリー先生の声呼びかけているようで、スーザンは故郷に帰る決心を固めていました……。

この物語は昨年十月半ばに出版されましたが、以来、さまざまな反響が訳者の私のところ

や、出版社（文京区小日向三十四―七 日向房電話 〇三・三九四二・七八四〇）に寄せられました。読んだ人めいめいの心に、かつて教えを受けた先生方の面影がふと呼び起こされたようでした。ある読者は、やはり農村で地域の人々の愛情に囲まれてのどかな日を送っていらつしやる九十余歳の伯母さまのことを記して、「アイヌ伝説に登場するコロボツクルのように小さい、小さい伯母ですが、背は小学校に教鞭を取っていた昔そのままにシャンと伸びています」と書いておられました。

なつかしい先生の思い出は私にもあります。旧制女学校時代の恵泉女学園で英語の手ほどきをしてくださった宮崎貞子先生。翻訳を仕事とするようになった私にとって、英語との最初の出会いの仲たちをしてくださったことになります。

宮崎先生は津田塾大学の前身、津田英学塾がま

だ女子英学塾と呼ばれて麹町にあったところのご卒業で、私は一年生から英語を教えていただきましたが、真剣で、丁寧な教え方が心に残っています。いつも地味なお召し物で袴ははいていらっしやらなかったのですが、戦前には珍しいオーラルの授業でした。"Am I walking quickly or slowly?" と教室の中をあるいは急ぎ足に、あるいはゆつくりと歩いて質問なさっていたご様子を感じ出します。

四年生の秋、小平の津田塾で恒例の英語劇の公演があつて、宮崎先生は土曜日の午後、希望者を連れて行ってくださいました。武蔵野の面影の残る校内を歩き、個室もある寮舎の、先生の姪御さんのお部屋を見せていただいたりもしました。ちようど野村胡堂氏のお嬢さん、野村瓊子さんの少女小説『七つの蕾』で津田の寮に住むさゆりという主人公（神谷美恵子さん、当時の前田美恵子

さんがモデルだと、美恵子さんのお友だちから聞いていました）に憧れていたわたしは、津田の、それも寮生になりたいと強く思ったものでした。

英語劇はシェイクスピアの『十二夜』でしたが、その午後のことでわたしの記憶に残っているのは、秋の青空のもとをいつになく若やいだ足取りで先に立って木立の間を創立者津田梅子先生のお墓に案内してくださいだった宮崎先生です。黒いお着物の裾を蹴るような、闊達な足さばきにひるがえって見えた裾の裏地の赤い色があざやかでした。

翻訳の仕事が続けて五十年。その出発点はあの秋の日にあつたように思うのです。

宮崎先生は熊本県のご出身。孫文と親交のあつた宮崎滔天の姪に当たられると聞いています。

（翻訳家）

# 「児童の世紀」を振り返る

## ―その十二―

本田 和子

### 子ども王国の変貌Ⅱ受験戦争への突入

のびやかに、パワフルに、子どもの時間を謳歌していた筈の彼らの世界に、異変が起こり始める。義務教育を終えようとする彼らの前に、高校受験がの

しかかってきたからである。大量の子ども集団は、大量の受験者集団に変化し、激烈な受験戦争に突入する。

当時の母親大会のスローガンとして、しばしば掲げられたのが「高校全入」であった。一九六〇年の

中学生人口は約五九〇万人、それに対して、高校生総数は三二〇万強。全入とはいかぬまでも、高校進学率は既に五〇パーセントを越して、高等教育への志向は、急速に人々を支配し始めていたのである。

このことは、戦後の体制の変革と無縁ではない。

戦後処理の一つとして推進された農地解放や財閥解体、それに加えての個人資産の統制などによって、先祖からの遺産やなまじつかの財産など、生涯の安穩を保証してはくれないと知らされた大衆の意識は、子どもたちにより上級の学歴を持たせることで、将来に対処しようとする。従来は、ともかく家業を継げばよいとされていた子どもたちも、より上級の学校に進学し、自身の将来を自身の力で切り開くことを期待され始めたのであった。

加えて、華族制度の廃止や財閥・地主の解体など、いわゆる特権階級の身分剥奪により、大衆の平等意識に火が点けられたことも一因であろう。士農

工商の身分階層の解体された明治維新时期と同様、

「学歴」が上位階級への移動を可能にするものと幻想され、学歴志向が加速化されたのであった。戦火に弄ばれて進学どころではなかった親たちにとって、わが子の上級校進学が生きがいの一つとなり、結果として、「進学」と「受験」が、子どもたちの前に辛苦に満ちた関門として立ち塞がる。しかも、時あたかも、ベビーブーマーの世代。母親たちの全入の願いも空しく、約半数は落伍者とならざるを得ないのが現状であった。同年のマスコミには、「中学浪人」という言葉が出現し、話題を呼んでいる。

中学校が、急速

「進学予備校」と

化し、偏差値学力による子ども振るい分けが積極的に推進されたの



も、こうした実情からみてやむを得ないことではある。母親たちの「高校全入」という願いを何とか実現させ、希望者全員をどこかの高校に入学させねばならないとしたら、とりあえずの帰結として、そこに生じるのは学力による選別と分類に他ならない。本人の志望は別として、合格可能な高校をあらかじめ予測して、それへの対策を効率的に講じること。これが、中学校における進学指導のてつとりばやい方針ということになれば、偏差値学力の向上のため、親子教師こぞって狂奔する羽目になるのも無理もない。

### 管理され個別化される子どもたち

それまで、手に終えないと放置されていた子どもパワーは、急遽、「進学」「受験」という標的に向けてコントロールされることになった。受験指導者と化した教師たちが、「高校合格のため」という錦旗

を掲げて、それまでの意気消沈ぶりを忘れたように精力的に腕を振るい始めたのであった。クラブ活動や自主学習を重視し、子どもたちの個性の解放をキャッチフレーズとした戦後の学校教育は、このあたりでその幕を下ろし、子どもたち一人一人の差異は、個性ではなく選別の目安として振るい分けに使用される。そして、この急変ぶりについて行けない子どもたちが出現し、不登校・長期欠席などという言葉が私どもの耳目を脅かし始める。

「不登校」とは、子どもたちが、自身の身体行為において学校の在り方に異議申し立てすることである。それに対して、一方では、より過激な行動も現れる。すなわち、膨れ上がった子どもたちの群れに対して、一時は手に負えないと放置しながら、ほどなく「受験」を盾にして強制と束縛を開始した大人たちの無節操ぶりに対して、不登校のような消極的抵抗ではなく、学校を嫌悪し拒否する子どもたちがや

り場のない怒りを爆発させて校内で暴力を振るうのである。とすれば、当時、しばしばメディアを賑わした「登校拒否」と「校内暴力」は、この意味で、同じ盾の表裏の面と言うことが出来よう。

ところで、この同じ一九六〇年代に、東京都は子どもたちの路上スポーツ禁止を通達している。過熱化したモータリゼーションの帰結であり、子どもたちを事故の危険から守ろうとする措置ではあったが、規制されるのが自動車ではなく、「子ども」であつたところに、この時代を徴付ける「あるもの」が、こつそりと顔を覗かせているように思う。すなわち、子どもへの対処に際して、彼らのニーズを掬い取るにまして、管理による効率を優先させる、という……。道路を格好の遊び場とする子どもたちの心理などは等閑視され、交通効率が優先された通達が出されたのがその何よりの証ではないか。

その結果でもあろうか、一九六三年ころから遊び

場不足の深刻化が伝えられ、相次ぐ冷蔵庫内の子どもの窒息死がニュースを賑わす。つまり、遊び場としての道路を奪われ、原っぱの減少に不足を託つた子どもたちが、廃棄物置き場の空き地で遊ぶさなかの事故が、冷蔵庫事件ということなのだ。ここから聞こえてくるのは、進学と受験で締め付けられ、遊び場も奪われた子どもたちの悲鳴ではないだろうか。

そして、大人世代に対する子どもや若者たちの大規模な異議申し立てが起こる。一九六八年、東大医学部から発生した紛争は、全学部に広がり、やがて、全国規模の大

学紛争へと拡大して行つた。言うま

でもなく、一九六八年といえ、ベビーブーム時に生



まれた赤ん坊が大学生になっている。そして、プー  
ムの末端は高校生として熾烈な受験勉強に明け暮れ  
ていた。大学生は「大学闘争」というかたちでゲバ  
棒を振るい、受験生たちは、「家庭内暴力」という  
新語でマスコミを震撼させる。一九六〇年代は、ま  
さしく暴力の季節であった。

大人世代は、膨張した子ども・若者集団に対抗す  
べく、遅ればせながら「管理主義」を持ち出し始  
めていた。マスとして迫ってくる子ども・若者の巨  
大な力に対抗すべく、管理方針の徹底を期そうとし  
たのである。「任命教育委員会法」が公布され、一  
九四八年「教育委員会法」が公布されて以来の公選  
制に終止符が打たれたのが、一九五六年であり、  
「大管法」が世間を騒がせたのが一九六二年であっ  
た。これら一連の出来事が物語るのは、行政レベル  
での管理強化の動きであろう。加えて、個々の学校  
内部でも、「校則」という形の子どものたちの生活コ

ントロールが開始されていた。一九六四年、メデイ  
アは、大阪箕輪市の高校で、長髪問題で生徒一〇〇  
〇人が騒ぎだし、警官・機動隊一〇〇人が出勤して  
沈静を図ったことを報じた。また一九六六年には、  
神奈川県下の高校で、校風に反発した生徒二二〇〇  
余人が授業放棄の挙に出たことを伝えている。

自由奔放に跳梁する子どもの大集団に周章狼狽し  
て手をつかねていた大人集団が、漸く、態勢を立て  
直そうとしたその時、受験希望者数と目的校との間  
の不均衡から、当然のことながら受験競争が激化し  
始めてきた。大衆層に広がった学歴志向が、それに  
拍車をかける。そして、この動きは大人たちを利  
し、「偏差値」「内申書」など強力な武器を手に入れ  
た大人たちは、子どもたちを徹底した管理統制の網  
の中に掬い取ろうと試み始めた。その帰結として、  
とにかく「合格許可証」を手に入れるまではと大人  
の管理支配を受け入れる者がいる一方、不服従の意

志を「登校拒否」や「校内暴力」、果ては「家庭内暴力」の形で表明するしかないという、追い詰められた者たちが出現したのだった。

軌を同じくしてわが国経済は上昇期に入り、「岩戸景気」と呼ばれた一九六〇年に一六・七兆円だった国内総生産が、七〇年には約四・七倍の七五・三兆円に達した。と同時に、働く者たちの労働時間も六〇年の出勤日数の月平均が二四・三日、七〇年には二三・二日に達し、大人たち、つまり子どもの親世代は、先進国では最高の週六日の出勤で、ドイツなどと比較するとほぼ一・三倍程度の忙しさのなかに巻き込まれていった。しかも、経済戦争に巻き込まれたのは大人だけではなく、一九六三年の経済審議会による答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」により、能力主義教育が強調され始めたことで、子どもたちもまた、財界の求めに応じた能力保持者たるべく、いまの学校生活を準備に当て

るという事態に追い込まれていく。

結果として、一九六〇～七〇年にかけてのわが国は、わき目も振らずに働く親たちと、将来のためにと管理の強化された学校教育の支配下で、不満を堆積させる子どもたちとが、住空間だけを共有しつつ各個バラバラに暮らし始めた時代と言うことになる。「カギツ子」が社会問題となり、メディアに取り上げられるのも、このころからであった。

### 出生率増減の悲しいパラドックス

大人世代の子どもパワーに対する対抗措置として、「遅ればせながら」の管理主義が試行され始めたころ、皮肉なことに当の子ども軍団の数が減り始めて



いた。ベビーブームとは、戦後のつかの間の現象に過ぎず、出生率は、鮮やかなまでに低下の一途を辿り出したのである。因に、その変動を数値で示せば表1のようになる。

一九七〇年の第二次ベビーブームで少々盛り返した出生数は、しかし、その後は凋落一方である。第二次ベビーブーム世代が成人し、結婚年齢に到達している現在に至っても、その傾向は変わらない。わが国の場合、一日の出生数が五〇〇〇を上回り、特殊出生率も三・〇を超えることなど、到底、望むべくもないということのようだ。

ところで、というより「にもかかわらず」と言うべきだろうか、あたかも子どもパワーへの対抗策のように登場した「管理主義」は、状況の変化にためらうこともなく、むしろ日増しにその力を蓄え、圧力を強化していった。その揚げ句に、登下校の時刻や制服・持ち物、果ては髪の色や長さまで、微に入り

▼表1

年 次	1日の出生数	年間出生数	特殊出生率
1950	6,404	2,337,507	3.65
1960	4,388	1,606,041	2.0
1970	5,299	1,934,239	2.13
1980	4,308	1,576,889	1.75
1990	3,347	1,221,585	1.54

厚生省「人口動態統計」…人口問題研究所「人口問題研究」)

細にわたって子どもらに干渉し統制して、学校をさながら刑務所か軍隊のように、規律と規則の猛威を振う場所へと変貌させてしまったのであった。受験競争の激化に伴い、「内申書」という武器を片手にして……。

膨張した子ども人口が、学校教育のなかに図らずも残ってしまった負の遺産、その一つが「管理主義」なのだが、それに加えて、今一つ、「受験競争」もそれであると言えないだろうか。前者が子どもパワーを押さえ付けるための大人側の苦肉の処置だとしたら、後者は、大勢の同世代をかきわけて何とか勝者の椅子に座ろうとする者たち、より正確には「座らせよう」と願う親たちによって、作り出された悲しい対策だったのである。しかも、この両者は、本来なら、少子化とともに消えていつてしかるべき種類のものであるにもかかわらず、以後もしつかりと生き残り、それどころか、益々健在で猛威を

振り続けている。

学校教育に関しても、子どもの数が減れば、一人一人に即して丁寧な個性教育が実施可能となる筈である。ベビーブーム世代には想像もつかないほどの、子ども对教師の心の通い合いと、羨ましいほどに行き届いた義務教育が実現されてしかるべきであろう。因に、小学校児童と教師の比率とその変動は、表2の通りであった。

この資料によれば、ベビーブーム時代には、五〇人学級を余儀なくされていた小学校も、一九七〇年以降は三〇人未満の学級構成で、行き届いた指導が可能となった筈である。この傾向は、中学校の場合もほぼ同様である。たとえば、一九六五年には三



▼表 2

年 次	児童総数	教師総数	比率
1960	12,590,680	360,660 ( -5000 )	40.5
1970	9,493,485	367,941 (    ♫    )	29.7
1980	11,826,573	467,953 (    ♫    )	28.2
1993	8,7688,81	438,064 (    ♫    )	22.6

(文部省「学校基本調査報告書」)

七・七だった比率が、一九七〇年には、二七・〇と減少している。つまり、教師一人で約三八名の責任を持っていたのが、五年後には、一〇名減の二七名でよくなったと言うことなのだ。

しかし、変えられたのは、学級規模の大きさではなかった。私どもに身近な幼稚園に関しても、クラス規模四〇人という数字が、いつまでも付きまとい、保育者たちを悩ませたことは周知であろう。子ども数の減少にもかかわらず、教師たちの指導態勢は「マス」から「個」へと変わることもなくて、逆に「子どもたちの自由」を制限する方向に動いた。管理を厳しくして規則を徹底させ、失われた規律を回復させる……。アナクロニズムとも言うべきこの方針は、しかし、抜本的な検討もないままにその後の学校生活を支配し続けることになったのである。

(聖学院大学)



# 幼児期にのぞみ見るものは

## 生涯につながる

—「すてきにするの」再考—

津守 真

私はかつて、粘土の中にボタンを包み込んで、「すてきにするの」と言う五歳の子どものことを記録に残しておいたことがあった。私自身がその子どもたちの保育に忙しく追われていた最中だったが、こんなに面白いなまの出来事をとっておかなければと思い、その言葉だけをメモにしておいたのだった。我が家の陽のあたる縁側で、長い時間遊んでいた光景は明瞭に私の記憶にとどまっていて、折にふれて思い起こ



す。そのメモを取り出して考えたのはそれから六年後、その子たちは学校に行き、私の手からはなれて、同じ縁側には子どもの影もなく、私は木々の緑をみつめながら考えていた。子どもが素敵にしたいと自分のイメージをもって遊び始める前提には、子どもが安心して何かをできる場が必要であった。保育者との間で落ち着いていろいろためしているうちに、自分が何をしたいかが明瞭になる。(注)

「素敵にする」という言葉に出して言ったのは五歳の子どもであるが、もっと小さいときから同じ願いが子どもの心にあったのは確かである。その子が二歳のときに玄関に飾ったクリスマスツリーに全身が吸い付けられるように、うつとりと見つめて動かなかった。それをどのような言葉で記録にとどめればよいか私は分からなかったが、その姿は私の心に焼き付いてはなれなかった。自分の手で素敵なものを実現したいという望みは常に子どもの内にあり、実現までには大人も子どもも長い時間もちこたえていなければならない。それを探す過程に付き合うのが保育者だと言ってよいだろう。「もしも桜の木に意識があるとしたなら、花が咲くのを待ちつつ過ぐす忍耐や期待をどのように表現するだろうか。人間の場合には、その過程に大人が参加しつつ、子どもの内に自らの理想が生まれいるのを待つ。それは二歳のときにもあるし、五歳にも、十二歳にもある。そして四十六歳の壮年にもある」(一九七二年十二月十三日)と私はそのとき考えた。その晩、ベットに寝にいった下の子どもに、電灯



を消して寝なさいと父親が言うと、せっかくお母さんが一緒に寝ておふとんが暖かくなったのに自分で電灯を消さないなんてひどいよと、エンエン泣いた。これは温かさの触覚によって美を実現しようとする子どもである。素敵と思うものは人によって違う。

その翌日、私は朝から保育に出て、いつも突拍子のないことをして大人を困らせるKくんを夕方までみていた。これらのことを考えていたので、その日私はことばを使わないで傍らにいろようにつとめた。ことばを発すること自体が人を束縛する力をもっている。だまって一緒にいると、Kくんの世界が身近に感じられた。弁当をひとりで開いて食べてしまったとき、電話が鳴ると飛んでいつて受話器をとったときなど、私はいつもよりも束縛的でなかった。ところが、Kくんが室外に飛び出したときにはつかまえて部屋の中に入れた。庭から柵の外に出ようとしたときには出ないように願いつつかけっこをした。私はこの空間の中だけで自由を保っているのではないということを一日の中で数度痛く思わされた。「子どもが自分のしように思うことを実現する前には実現をさまたげている私自身の心の中の遮る要素と取り組まねばならぬ。Kくんは私をトイレの中に閉じ込めてその間に何かをしている。私はいかに自分のことだけしか心になかったかを思わされた。それらを経た後に、Kくんは突然レールを並べ、ブロックを並べ、自分で遊びはじめた。ようやく素敵と思うことに向かっ



て進みはじめたのだろう」(一九七二年十二月十四日)。

それから二十五年たった。

私は保育者として、いろいろの子どもの実現の願いに数多く付き合ってきた。ある子どもは皆の中でままごとをしているように見えるがそのままとは美しく並べることにある。その子はある時期には女の子を描きつづけ、描かれた女の子は毎日素敵になっていった。別の子どもは街の店でどうしても欲しかった色とりどりのビー玉を園にもつてきて地面に並べた、その子の繊細な美的感覚によれば並べ方が少しでも違ってはいけな。しばらく見ているとその美しい並べ方が分かってくるのだが、通りすがりにはそれは見えない。寒い冬の園庭で長い時間子どもと一緒に座っていた母親は本当の教育者だと思う。私の養護学校には屋根に上って太陽が沈むのを飽きずに見ていた子どもがいた、その子の描いたピンクと水色の空の絵を、母親は翌朝持つてきて見せてくれた。旗が風になびくのをいつまでも見ていた子ども、保育室の窓辺のカーテンがうまく風に揺れるように苦心する先生などと述べると限りがない。

ことばで表現しない子ども、素敵にしたいと言って主張する子ども、他人に訴えることなく黙ってひとりで追及している青年、ときには社会に挑戦して反社会的になる少年、だれもが自分なりに素敵にしたいことを夢見ている。幼いときにそれを助け



られて実現した体験をもつ人は幸いである。

気が付くと、いま椅子に座って机に向かう私の傍らに子どもはいない。子どもたちの幼いときの私の心を揺り動かしたひとこまひとこまの情景は記憶の中にだけあって、もはや目の前に見ることはできない。そのひとりひとりが十代、二十代、三十代、あるいはもつと先の年齢で、いまなお何かをしようと夢見て歩みつづけている。ままごとの皿の上でなくもつと違うことで、もつと広い舞台で、それぞれなりに素敵なものを実現したいと苦心している。

地平に赤く沈む太陽を、私は先日兵庫の山の中で見た。地平はどこまでいつても遠くに仰ぎ望むものである。ボルノウが言うように地平は最も確かである。幼いときから心に望み見るものを、人間は死の寸前まで追い続けているのではないか。

注 このことを私は『幼児の観察研究―反省と出発』幼児の教育七十二巻五号一九七三年に記した（『子ども学のはじまり』フレーベル館、一九七九年、一二六頁―一二三三頁参照）。

## 志賀志那人の

### 大阪北市民館保育組合から

福元真由美

はじめに

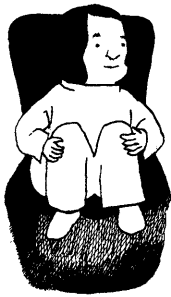
子育てを社会全体で支援する仕組みづくりを急がねばならないと、さかんに声があがっている。戦後、核家族が一般化し、夫は仕事、妻は家事・育児

という夫婦の家庭内分業も浸透した。地域では、他人の子をわが子のように見守る大人がいなくなり、子ども同士の遊び集団も消えている。身近な相談相手もなく、昼間家の中で、子どもと向き合っている母親や、仕事と育児を両立させている母親たちの負

担感は、これまで以上に切実だ。そのために、保育園の役割も、ますます大切になってきている。しかし、都市部の場合、乳児をあずかる公立保育園の数は不足しており、就労する母親の「保育園探し」における苦労は、なみ大抵ではない。彼女たちの子育てを助けようと、最近では、市町村ごとに地域の実情にに応じて、乳幼児の一時あずかり、早朝・夜間の保育園への送迎などを請けおう、保育の互助組織ができつつある。

そこで今回は、大正期末に、大阪市の北市民館で協同組合の組織として成立した、志賀志那人（一九二―一九三八）<sup>註</sup>の保育組合をとり上げたいと思う。当時の大阪は、第一次世界大戦後の近代工業の発展にともない、周辺に綿業、機械工業などの工業地帯をかまえる商工業都市に成長していた。その安価な労働力は、ほかの地域から流入する人々の受け皿となった、スラムの拡大により支えられた。志

賀が、一九二一年に初代館長に就任した、天神橋筋の市民館（一九二六年に北市民館と改称）の北側には、南の釜ヶ崎にならぶ北の長柄という、大阪の代表的なスラムが広がっていた。志賀は、この地でのセツルメントに自らの活路を見いだし、さまざまな協同組合を組織していく方法を取り入れている。保育組合は、親を組合員とすることで、彼らの子育て協同化をはかろうとする試みである。そして、志賀の設立した木工、和裁の同業者組合、愛隣信用組合などととともに、生活の各領域を人々で支えあう「協



同社会」を目指すものだった。以下では、(一) 協同組合による組織、(二) 露天保育、(三) 「相互主義」による人間関係、の三つの点において保育組合の特徴をとらえていこう。

### 北市民館保育組合の設立と組織

志賀が、市民館で保育事業を開始した理由には、二つあった。一つ目は、市民館周辺の子どもたちが、適当な遊び場もなく、日中放任されていたからである。二つ目は、親の子育てに対する精神的・金銭的な負担を軽減するためであった。志賀によれば、一九二五年時点での、大阪における公私立幼稚園数は六五、託児所数は、およそ三〇とされている<sup>注3</sup>。この数字は、大阪の保育期にある幼児を収容するには、あまりにも少なかった。このため、毎年のように入園競争がおこり、入園できなかった子どもたちは、路上で遊び、買い食いをして一日を過ごし

ていた。一方、母親たちは、家庭での育児の行き詰まりや、遊び場の不足に不安感をまし、内職や工場で働く場合には、子どもに与える食事代などにも悩みを抱えていた。

志賀による保育組合の発案は、このような親たちの、個人の養育では保育の深みに欠けるという心配や苛立ちを、子育ての協同化に向かうエネルギーへと転じさせるものだった。彼は、大阪購買組合共益社を設立した賀川豊彦とかかわり、協同組合への理解を深めたが、保育の協同組合は、彼のオリジナルな発想である。同年七月に発表された、志賀の「協同保育の宣言」には、次のような記述がある。

「今日の時勢では自分の家庭の力だけでは子供を立派に育て上げる事は困難です。……やり度いと思ひ乍らも独力で出来ない多くの事があります。……皆様の心と力とを一つにして協同で子供を保育し、

その幸福を増進するに必要な事業を致しましょう。<sup>注4</sup>」

この「宣言」の反響は大きく、三ヶ月後には、一五〇人の申込者を数えるほどになった。しかし、志賀が最初に試みた、母親の交代制による保育活動は、彼女たちの知識・経験の不足により失敗している。そこで、保育の質を向上させるために、保育組合で保育者を採用することになった。一九二六年の記録では、組合員三七九人、在籍幼児二三一人、平均出席一六五人、保育者七人であった。

なお、保育組合では、保育を委託する親と組合の賛同者による民主的な組織づくりがなされていた。

「北市民館保育組合規約」（一九二九年）によれば、組合員を代表して運営にあたる理事一七名は、総会での選挙により選出され、そのうち一人は、保育者の中より選任されている。また、組合員より選ばれた三人の監事が、組合業務の執行や会計に関する監

督にあたった。出資金については、組合そのものを維持する保育組合費を、月額一口十銭とし、二五口以上何口でも出資できた。このほか、保育を委託する親は、保育の事業経費として、一月あたり二円五〇銭を納めている。

### 露天保育

北市民館保育組合の保育の特徴は、電車を利用して郊外に子どもをおくり、野外で露天保育をおこなった点である。当時は、橋詰せみ郎の家なき幼稚園が注目され、彼と親交のあった志賀も、その影響をつよく受けていた。

保育組合の設立時には、市民館三階の講堂や屋上を利用するほか、近くの空き地や淀川に近い寺院の境内で遊戯をさせていた。その三ヶ月後、大阪の天神橋筋六丁目と京都とを連絡する新京阪電車が千里山まで開通し、電車を利用した郊外保育が構想され

た。路線沿線を下見した志賀は、市内でありながら、千里山、生駒の連山、神崎川に囲まれた自然の豊かな下本庄を保育組合の保育場として選んだ。しかし、下本庄にも都市化の波が押し寄せたため、一九二六年九月に千里山付近の豊津村に活動の場を移し、ここに郊外園舎を設立することになった。

志賀が露天保育をすすめた理由には、幼少時に自ら阿蘇の大草原に遊んだ経験のほかに、都市生活における幼児教育への批判があった。彼は、都市の幼稚園や家庭を「眩まぐるしい人込み、交通機関、畳、襖、障子などの障害物や、してはならないの禁止の声で出来上がっている子供の社会」という<sup>注5</sup>。自然の中で保育することは、都市の喧噪や不良住宅の密集地域、大人の不自然な要求を押しつけられる世界から子どもを引き離し、彼らを身体的にも精神的にも癒す方法であった。

### 保育組合における人間関係

北市民館保育組合の根本方針としてあげられるのが、人々の「相互主義」の徹底である。これにより志賀は、国家の恩恵的な施設によらない保育集団の、相互的な人的結合をつくりだそうとした。その「相互主義」のあり方を、保育者と母親の関係、親同士の関係の側面からみてみよう。

#### 保育者と母親の関係

志賀は、保育者を「先生」「保育技師」としてよりも、子どもの「お母様」「お姉様」として、保育組合にむかえている。<sup>注6</sup>彼女たちには、幼児を保育するために、高等女学校卒業程度の教養がもとめられた。志賀は、保育者にたいし、「やがて母親たらんとする女性」として、協同保育の趣旨に賛同し、組合員の母親を代表して保育にあたることをといてい

る。つまり、母や姉という役割は、保育の専門家としての資質を不要としたのではない。これは、保育組合が、母親の協同による組織であることを強調するためであった。保育者は、たんに組合と雇用関係をむすび、母親の子育てを第三者的な立場で代行するものとして捉えられたものではなかった。

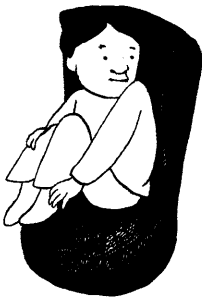
子育ての協同者として、保育者と母親のあいだには、友愛の情にもとづく相互扶助の関係がきずかれつつあった。保育者には、「子供に就いての母親の相談相手<sup>ママ</sup>」として、「人の友としての温かい力や母性に対する理解や家庭苦やその禍福の同情者」であることが望まれた。毎朝のあいさつや休んだ子の家庭訪問など、日常の母親との親しげなやりとりに、志賀は、「自由なつながりのうち」にある「強いられぬ深い関係」の芽生えをみいだしている。保育組合の保育活動に、母親と子どもを結びつけていく絆は、このような、保育者と母親の協同する実感に支

えられていたといえるだろう。

### 親同士の関係

北市民館保育組合において、親たちの関係は、二つの意味で把握されていた。

一つ目は、子どもの親という同じ立場において、ともに協同するという関係である。志賀は、「協同組合には階級性なるものがない」といい、地位、職業、所得の差異をこえた連合として保育組合をとらえ<sup>注8</sup>、母親たちは、「平等に団結しなければならない」



という<sup>注9</sup>。そのために、一世帯ごとの組合費の出資額は、その所得におうじて減免され、さまざまな階層の親たちに、保育組合に参加する機会があたえられた。親たちは、個人を名誉職や特権的な立場におくことなく、みな組合員として一人一票の権利を持ち、子どもたちに等しい待遇を保障しようという意識を共有していった。

二つ目は、それぞれの親の個性や特技を生かしながら、保育の質を高めていく関係である。保育をはじめから三ヶ月後、親たちの要望により、保育組合の第一回運動会が、豊津村の千里山花壇で開かれた。この運動会の準備と進行は、すべての親たちの手でおこなわれた。ここでは、玩具製造業の父親が、運動会のために遊具をつくり、呉服屋の親が、子どもの運動着を用意するなど、それぞれの職業の技能を生かした協力関係が生じている。親たちの「協力の基礎」は、階層や職業の「等質」性にある

よりも、それぞれの「不等質な成分」によって、相互に補いあう場合のほうがより充実するという、志賀の認識も、このとき捉えられたものだった。<sup>注10</sup>

### おわりに

北市民館保育組合は、親たちの自主的自律的な取り組みにより、いかに、新しい保育の社会集団を形成するかという試みだった。その「協同保育」は、志賀により、幼児施設に「託児所と幼稚園との二種の機関」があるという「差別層」を「超越」するものとして構想された。<sup>注11</sup>しかし、これは幼保一元化を意味するのではなく、その設備、運営、経費の管理を親たちが協力しておこなう、幼稚園でも保育所でもない第三の保育組織の誕生を意味している。

また、行政側の立場にあった志賀の指導により、市民館に保育組合が設立された点も重要であろう。ここには、保育を目的とする官民の連携のあり方が

提示されている。すなわち、地域の住民を主体とする組織に、行政が保育場の提供、運営・財政に関する助言をおこなうという仕方、地域における子育ての協同性が支えられていたのである。

(東京大学大学院)

#### 注

1 志賀は、一八九二年熊本県阿蘇郡に生まれ、一九一六年東京帝国大学文学部哲学科を卒業後、大阪基督教青年会、大阪師団歩兵第八連隊をへて、一九一九年に大阪市に就職し労働調査嘱託として働いている。

2 杉原薫、玉井金五編『大正・大阪・スラム もうひとつの日本近代史』、新評論、一九九六年

3 志賀志那人「ロッヂデイル綱領に基ける協同保育」『社会事業随想』、志賀志那人氏遺稿集刊行会、一九三〇年、六一頁

4 志賀志那人「保育の協同組合に就いて」『社会事業』第一三卷三号、社会事業協会、一九二九年、五六～五七頁

5 志賀「子供の国」『社会事業随想』、前掲書、二二〇頁

6 志賀志那人「子供の国（続編）」『子供の世紀』第五卷第二号、大阪児童愛護連盟、一九二七年、五～七頁

7 同右、九頁

8 志賀「社会事業の自主的経営について」、『大大阪』第二卷第一号、一九二六年、三五頁

9 志賀「子供の国（続編）」、前掲書、一〇～一一頁

10 志賀「子供の国」、前掲書、二二三頁

11 志賀「子供の国（続編）」、前掲書、一一頁

子どものいる暮らし―男・夫・父

## 単身赴任者の子育て便り

岩立志津夫

家族はできれば一緒に生活する方が自然としても、事情によって離れ離れの生活を続ける家族は多くあります。我が家のケースもその一つで、家族（妻と二人の子ども）を東京の小平に残して、僕は静岡での単身赴任生活

を続けています。また、僕は発達心理学を専門とする大学の教員で、現在「育児論」の講義も担当しています。その僕が、どんな形で育児に係わっているか、そんな興味からか、知人の一人からこの欄での原稿執筆の打診が

ありました。どうしよう？ 断わろうか？

ちよつと迷ったけれど、普段思っていることをこの機会にまとめるのもいいかもしれない、と考え直して、引き受けました。

僕にとって育児は、週末だけとしても、生活の大きな部分を占めています。しかもこの育児は現在の出来事としても、それにとどまらず、多数の複線で過去に結びつき、多数の可能性として未来に開けています。そこで、過去・現在・未来の三つの視点から、僕にとっての育児について率直に述べてみたいと思います。

まず過去の出来事からお話ししましょう。その内容は、独身時代のあるエピソードと出産前後の体験です。エピソードは、他愛もない、一人の男の思い込みを作りました。時は

十五年程まえの独身時代にさかのぼります。

僕はファミリーレストランで夕食をとっていました。その時、隣の席に父親とおぼしき男と中学生ぐらいの女の子が座りました。学生時代から家族というものに興味、憧れ、夢などの複雑な気持ちを持っていた僕は、その二人に気づかれないように観察していました。そして、あることに気がつきました。この二人の間には会話がほとんどなかったのです。食事を注文する時ちよつと言葉が出ただけで、食事中両方とも押し黙り、お皿の食事をじつと見ているだけで、互いの顔を見ることが決してありませんでした。楽しそうでもありません。結局そんな状態のままで食事を終えて、帰って行きました。

どうして二人の間に会話がなかったのか、



真相はわかりません。もしかしたら、父娘ではなかったのかもしれませんが。しかし、独身の僕にはシヨックで、この経験は現在の僕の育児に大きな影響を与え、一つの思い込みを植えつけました。その思い込みとは、「時間やものの共有へのこだわり」と言えます。ここでいう「もの」には、興味や食べものなど具体的なものから価値観や人生観のような抽象的なもので、多様なものを含みます。どれにしろ、人間が語りあう時、お互いに共有するものがないと会話は続かない、それが僕の思い込みの内容です。友達同士でも、夫婦でも、そして当然親子でも、共有しあうものがないと、会話ははずみません。ところが親子の場合、ものの共有はなかなかうまくいきません。親子は偶然で結びついた人間関係と

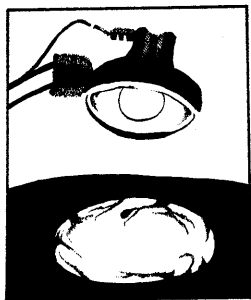
いう側面があるからで、子どもの興味と親の興味は一致するとは限りません。しかし時間の共有は、親の方で努力をすればある程度可能です。

次の話題に移りましょう。二人の子どもの出産場所は、僕が勤務している静岡でした。妻は、勤務地に近く実母や友人の多い東京での出産を希望しました。しかし、僕の強い希望で静岡にしてみました。理由は小さな理由と大きな理由の二つがありました。小さな理由は、むかしから日本で習慣化している里帰り出産に反対だったからで、大きな理由は全面的に出産や乳児の世話に参加したかったからです。また単身赴任の僕にとって、家族と一緒に生活できるチャンスはこの時しかありませんでした（実際、妻と同居したのは

この時だけです。出産にも立ち合いたかったし、ラマーズ法にも興味がありました。でも、出産予定の病院ではラマーズ法は不可能だったために諦め、出産立ち合いも直前になって出産が帝王切開になったため実現しませんでした。とは言え、出産立ち合いの条件だった夫婦揃っての妊婦講習への参加は、いい思い出です。男性の参加は僕だけと思っていたら、何人かの夫と会いました。

出産してからの育児は確かに大変でした。最初のはるひこの時には、夜泣きと排泄回数が多かったからで、次のあやかの時には、上の子の静岡での保育園通いと出産直後の大病が重なったからです。はるひこの育児では最初のこともあり、育児用品（ほ乳びん、紙おむつなど）を全種類買って試しました。あや

かの時は、生後一日目から両方の肺が気胸になって小児病棟への緊急入院、抱くこともできずに、生死の境をさまよう娘を遠くから眺めるしかありませんでした。妻の退院直後には僕自身が下血し、同じ病院の外科に緊急入院となりました。この事態ではどうにもならず、高齢の妻の実母に静岡に来てもらって、どうかか危急の時期を乗り切りました。幸い僕の病気は一時的なものと判明し、あやかの



病氣もどうにかおさまって、僕、あやかの順番で退院しました。祖母は帰京し、夫婦二人の育児に戻りました。しばらくしてのあやかの退院の日、元気だけどやせ細った娘と病院を出た喜びは今でも思い出します。

次に、現在の話をしましょう。時々大人は子どもに「うちゃんは、お父さんとお母さんのどっちが好き？」と尋ねます。我が家の場合このような質問を受けると、時によって多少の違いはあるとしても、もうすぐ三歳になるあやちゃんは「きょうちゃん（母親のこゝと、我が家では「お父さん」「お母さん」という呼び方はしていません）」と応えます。現在八歳になるはるちゃんの場合はちよつと複雑で、母親に怒られた後などは「やさしいからしーちゃん」と言ってくれることもあり

ますが、夜に寢床で母親に甘えたい時の様子を見ると、本心はやっぱ「きょうちゃん」のようです。

この文章を書いている十一月に入って、幸い僕には仕事が入っていないので、全ての土日は東京の自宅で過ごすことになりました。ところが妻の方は大忙しで、勤務先の仕事や親戚の七回忌などで、土日が不在の日が続いています。十一月に入って二週間続けて、土日は終日、二人の子どもの世話を僕が主に担当することになりました。我が家では、家事・育児に関して共同参画の原則が決まりなので、このような場合、全ての仕事を僕が引き受けることになります。妻は事前のお膳立てをすることもなく、「ジャーお願いね」という感じで出て行ってしまう。

例えば十一月十五日の日曜日には、あやちゃんが寝ているので寝ぼけているはるちゃんに留守番をお願いして妻を駅まで車で送っていきました。家に帰ると子ども二人はまだ眠っていたので、早速食事の用意をして、起きてきた二人に食べさせました。その後、着替えさせて、掃除と洗濯をしました。あやちゃんは外に行きました。はるちゃんも最近買ったパソコンのI.Magでゲームをしたがりました。しかし、はるちゃんは宿題が済んでいないので（常に自分から宿題を済ませることがないので、最近親子喧嘩が頻発しています）、それを済ませてからと伝えて、あやちゃんと外に行きました。娘は行きつけの公園に行くことが希望でした。しかしこの何週間かその公園行きが連続していたので、

親の一存で、久しぶりに少し遠くにある仲町図書館に自転車で行き、五冊の本を借りました。一冊は僕が読みたい『クマのプーさん』の原作本で、残り四冊はあやちゃんが選んだ絵本『いやだいやだ』などです。図書館の帰りに途中の公園で遊んだ後、買い物をして帰宅しました。昼食後は、いつものように添い寝であやちゃんの昼寝につきあいました。はるちゃんは友達と遊ぶために出かけました。あやちゃんが起きてからは外出し、バドミントンを買って来て、自宅近くの広場で遊びました。そして夕方、これで一日の終わりです。

「なんと平穏な日々、でも今日僕は何をしたのだろうか？」と最近時々思うことがあります。子どもと接することは確かに楽しい面が



あるとしても、正直言つて、長時間大人が子どもと過ごすことには苦痛を感じるのも事実です。小さな子どもとボール投げをする時、子どもは本当に楽しそうにその行為に夢中になっています。滑り台に登る時の子どもの笑顔は、作り笑いに慣れた大人の顔では絶対に見られないものです。でも、大人は一部の人を除いて、そのような世界に長時間入り続けることはできそうもありません。僕もそうで、時々妻とバトンタッチが必要になります。僕は育児に際して「男性だから……」という制限を設けずに来ました。それを実践するために、デイバッグにおむつを入れて乳児を抱っこヒモで抱いて学会に出席したこともあります。夜泣きにもつきあいました。でも、専業主婦のように長時間子どもと過ごす

ことは避けています。僕にはできません。次に未来の話をしましょう。これは簡単です。僕は、子どもとの時間や場所の共有が未来のよい関係に結びつくと思っています。おむつ換えの日々、妻と浴びたうんち鉄砲、苦労してつくった離乳食を何度もひっくり返された経験、公園の鉄棒でのくるりんこ、三輪車がころんでできた額のきずあと。それらは未来の子どもとの関係づくりの種です。今後子どもとの思い出という種づくりは続きます。でもこんな父親の思いを知って、子ども達は「親の身勝手」と大人になって言うかもしれません。でもいいのです。

(静岡大学)

# 過去と現在の間

山本 政人

一九九九年になってしまった。来年は二〇〇〇年である。区切りのいい時代に生まれ合  
わせて運がよかったというべきだろうか。

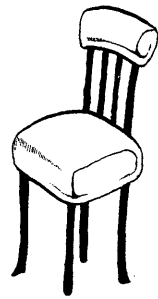
一九九九年と言えば、最近また話題になっているが、「ノストラダムスの大予言」の年  
である。今から三十年ほど前だろうか、本がベストセラーになり、映画も作られ、私も映  
画を見に行った記憶がある。

一九九九年七月に「恐怖の大王」がやって来て、人類に災厄をもたらすなどと本気で信

じていた人はいなかっただろう。しかし子どもだった私は「もしかしたら」という思いを抱きながら本を読んだり、映画を見たりしていた。「恐怖の大王」の正体については当時からいくつかの説があった。核戦争、環境破壊、隕石の衝突と

いった大規模な災厄が地球を襲い、人類は滅亡すると言われていた。まさかそんなことは起きないだろうと思いつながら、「もしかしたら」という思いも打ち消せなかった。

それから二十数年。忘れたころになって一九九九年が来てしまった。長年気にかかっていた予言の当否がいよいよ明らかになる。もちろん当たっては困るが、はずれたらどういう反応をするのだろうか。「予言なんて当たるわけないでしょ」と一笑に付すだろうか。「ともかくはずれてよかった」とほっとするだろうか。それにしても何世紀にもわたって人々に語り継がれる予言とはすごいものである。当たるかどうかは別として、また当たることなど滅多にないのだが、長い間人々の関心を引き続けるのは大したものである。私個人にはこの予言の話題はなつかしく、自分が生きてきた三十年を振り返るきっかけになっている。私事だが、最近「なつかしい」と感じるが多すぎる。年をとったせいかとは思いますが、どうもそれだけとは思えない。「ノストラダムスの大予言」のように昔流行ったもののリバイバルがあふれている。



子どもを見ていて奇異に感じることもある。それは今の子どもたちが「ウルトラマン」や「仮面ライダー」や「ガンダム」を知っていることである。「ウルトラマン」は今も新作が放映されているから理解できる。しかし「仮面ライダー」や「ガンダム」は新作はもちろん再放送もされていない。にもかかわらず子どもたちは「仮面ライダー一号・二号」や「ガンダム」はもとより、「ライダーマン」だの「ゲルググ」だのを知っていたりして、そのマニアックさに度肝を抜かれる。子どもはビデオを見て知っているのだろうが、私たちの世代でそれを知っている人は、テレビをよく見ていたマニアに違いない。

昔の特撮やアニメを供給する媒体はビデオだけではない。ゲームも昔なつかしい特撮やアニメを3D映像で見せてくれる。私が最近ハマったのもそういうゲームである。私たちが何かを選択する際、「なつかしい」とか「これ知ってる」という感覚は非常に大きい。知らないものよりまず知っているものを手に取ってみる。最近のゲームはどうもそれを狙って作られている。よく知られているもの、ブランドに頼りすぎである。新しいものが生まれにくくなっている。もつともこれは作る側だけの問題ではなく、買う側の問題も大きい。買う方としてはやはり慣れ親しんだもの、よく知っているものを選ぶ。

ビデオやゲームだけでなく、なつかしいものは巷にあふれている。私の場合、それは「なつかしい」というだけにとどまらず、より強力な作用を日常生活に及ぼし始めた。具体的には、昔見ていた特撮やアニメ番組を再放送やビデオで見たり、番組に出てくるキャ

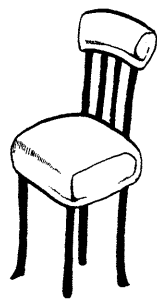
ラクターを象った玩具や日用品を買い集めたり、さらにはそういうグッズを求めてゲームセンターを徘徊するようになってしまった。メディアが与える影響について考えてみたいと思っていたが、

自分自身が格好の材料になった。二十年、三十年

前のテレビ番組を見直し、キャラクターグッズを集めるのはなぜなのか。

「なつかしい」という感覚について考えてみる必要があるように思う。昔のテレビ番組の再放送を見たり、昔の番組に出ていたキャラクターが登場するゲームを見たりすると、単にその番組やキャラクターを思い出すだけではない。それを初めて見たときのある種の感動がよみがえるような感じがする。それは実は言葉では言い表せるものではなく、「なつかしい」という言葉で表現するしかないのだろう。年をとった自分のなかに子どものころ味わった感覚がよみがえるのである。

そしてこの感覚は意外に強力なものではないかと思う。私の場合、テレビゲームにはまる一つのきっかけは、子どものころに自分でゲームを作ったことだった。その後、ゲームからグッズ集めに移行し、今やガンダムや仮面ライダーなどのいわゆる「ビジュアル系」キャラクターものの収集に没頭している。ほとんど「依存症」ではないかと思うほどである。お金の無駄遣いだとわかっていても集めずにはいられないのである。そして自



分勝手に分析してみると、これはやはり子どものころ、正確には児童期に見た特撮番組やテレビアニメの影響であろうという結論に達する。

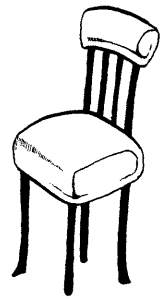
ビデオやゲームがなかったら、昔のヒーローやアイドルを思い出すこともなかっただろう。のみならず余計な出費を強いられることもなかったに違いない。しかしビデオやゲームで昔なつかしいものを繰り返し見せられることによって、どうも状況が変わってきたような気がする。今や私は「現在を生きている」のではなく、「過去と現在の間を生きている」のである。これはあくまで私の個人的体験から導き出した仮説だが、「過去と現在の間を生きている」人はたくさんいるような気がする。いろいろなケースがあって、その現れ方は千差万別だろう。しかしなかには私のようにキャラクターグッズを買いあさる人も少なからずいるに違いない。

この仮説から導かれる結論は、二十年後に再び『ポケモン』がブームになるということである。『エヴァンゲリオン』もブームになるだろう。『ブレンパワード』も今は見えている人は少ないが、いつか「富野由悠季の知られざる傑作」として注目を浴びるかもしれない。『新世紀エヴァンゲリオン』は一時話題沸騰だったが、「わけのわからない」作品だというのが大方の意見だった。大学生に『エヴァ』の話をしたら、ほとんどの学生から冷やかな反応が返ってきた。ところが雑誌やウェブサイトの投稿を見ると、中高生は違っていた。「シンジ（主人公）の気持ちが痛いほどわかる」「アスカ（主人公の相手役）の気

持ちを思うと、自分の苦しみなんて大したことないんだと思えた」など、熱い思いが語られていた。彼らが大人になってどうなるかは何となく想像できる。もし二十年後に再びブームが来れば、それは私の予想が当たったということとどまらず、「人は過去と現在の間を生きる」という私の仮説の正しさが証明されることになる。

ただし「未来を生きる子ども」という言葉があるように、子どもはまだ現在と行き来するだけの過去がない。だから現実と虚構の間を行き来する。これは大人が過去と現在を行き来するのと似ているが異なる活動である。過去と行き来する際に重要なのは記憶である。大人になるまでにはさまざまな体験があり、それが記憶される。そしてそれは大人になって何かのきっかけで呼び起こされる。今やビデオやゲームがそのきっかけを豊富に提供している。埋もれていた記憶は活性化され、再び私たちを二十年、三十年前へと誘うのである。過去への憧憬は若い人よりもやや年をとった私のような者の方が強いかもしれない。

ここでもまた「現実逃避」という言葉が浮かんできくが、人は現実から逃避するものであるというのが私の考えである。その形は人によりさまざまである。「過去と現在の間を生きる」というのはその一つであると言えるかもしれない。しかしそれは一時的な逃避では



なく、日常的に過去と現在を行き来しているのである。私たちが過去の思い出に浸ったり、過去の状況を現在の状況に当てはめたり、過去の経験を再現しようとしたりするのは日常のことである。そして過去の経験のなかで重要な意味を持っているのは、やはり子どもたちの経験ではないだろうか。これはすでに古くからよく指摘されていることである。しかし今日、ビデオやゲームなどの過去を容易に再生できるテクノロジーの登場で状況は変化しつつあるのではないだろうか。私のように過去に強くとらわれる人が増えてくるように思えるのだが。

（お茶の水女子大学）

# 遊びへの関わり

高橋 陽子

当園の年少組保育室には、プラレールの木製盤がある。レールも汽車も多種類ある。年少の担任は三回目であるが、年度によって時期によって子どもの汽車遊びの様子は違う。その都度悩むことも違ってくる。

入園してまなしの頃は、朝、保育室に入るな

り、汽車の入ったかごを取り、流し台の近くの机におき、手洗い、うがい中も、そこにあつて誰にも触られないことを横目で確認し、終わるやかごを抱きしめ、レールの方へ行き遊び始める子がいる。他の遊びたい子とどう折り合いをつけるか、でまず悩まされる。そのカゴを持つことが、初め

て親と離れ知らない場所や人に囲まれた時に安心を得られる唯一のことであれば、それもわかってあげたいし、やはり汽車で遊びたい他の子ども達の心の安定も確保したいと思うと、お互いの気持ちに頷くだけが精一杯の担任になってしまう。また、黒い汽車だけを握りしめたり、かごや袋物に入れて持ち歩くことから始まる子どももいる。他の子どもが長くつなげている中から黒だけ取ってしまったり、黒にこだわる子を見て、何だか黒が欲しくなって取り合いになったりもする。一つだけ貸して、と言ってみたり、他の組に探しにでかけたりしながら、気持ち軽くなったらいいな、と子どもに期待する部分も持つ。

入園してしばらく経ち、汽車で遊ぶ仲間が固定し始めると、別の悩みが出てくる。一つは、仲間うちでは、レールのつなぎ方も工夫し、走らせ方もちょっとした規則性を持たせよく遊んでいる

な、と感心させられる程なのに、いつもと違うメンバーが入ろうとするとかなり強烈に拒否すること、である。お互いにコミュニケーションをとるのが難しい時期なので、入る方もいきなり汽車を走らせようとするし、入られた方も、「バカ、あっち行け」など言って追い出そうとするところからとつ組み合いになってしまう。いつも担任がお膳だてをするのがいい、とは思っていないが、コミュニケーションのとり方を伝えることで、自分の気持ちを出すことと相手の気持ちを知ること、は、両方大切なこと、とわかっていって欲しいと思う。汽車遊びのメンバー構成と、まわりにいる子どもの様子とを窮いながら、担任としてどう動かうかと穏やかな気持ちで見えていられない時もある。

もう一つは、汽車遊びをどうしようか、という悩みである。レールはうまくつなげて一周してい

るし、汽車の走らせ方にしても、すれ違う時は、待つ所ができていてバックさせて一時そこにいて、のように暗黙の了解がされているようだ。アナウンスや鉄道の名は思い思いのことを言っているが、穏やかに遊んでいる。このような場面をみると、担任としてどう接したらいいのか、と考えてしまうことがある。しばらく様子を窮っていたり、「くるって一周つながつているのね」「ここが待つところなのね」と目で見てわかることを言ってみたり、「何線ですか」「どこ行きですか」と聞いてみたり、「駅はどこですか」「車庫はあるのかな」「積木でトンネルを作ってみたら？」と展開を促すことばかりを試みたりする。喜々として説明したり、そうだね、と作ってみたり、「先生はあっち行っていいの」と言われることもある。

子どもが担任を頼らずに遊んでいる時の担任の

在り方で、汽車遊び以外でも悩むことがある。子どもが自発的に遊びを見つけ、生活していく力を培って欲しいと願っていても、今度は遊んでいるそばから、どうにかして持続することや、もつと子どもの気持ちを高めるにはどうしたらいいかしら、と考えているのである。このことは、時と場合、その子ども、そのメンバーで対し方は違ってきているが、どう在るべきかで悩むことは多い。

昨年度は、年長の担任であった。男児三人組（仮にA・B・Cとする）が、テレビの影響で、ドクロゲームをやりたい、と言い出す。Aが言い出し、必要なものを集め（紙や風船のかわりのビニル袋など）やり始めると、Bはテレビそのもののイメージでやりたい、とかなり担任を頼り、Cはそこにいることが楽しい、という居方だった。担任は、Bに頼られることもあったが、Aのやりたい気持ちを實現させたく、又、せっかくなら回

りの子どもに参加してもらうことで、固まりがちな三人だけの関係を変えていきたい思いもあり、かなりの時間を費やした。結局、AやBの中にあるテレビの世界を幼稚園で実現させたい、という思いは担任にはどうすることもできず、自然消滅的になってしまった。今思うと、初めからメンバーの一人として三人組といえるのではなく、AのアイディアをBに伝えたり、三人組なりの過程を支える動きをしていたら、違うものが出てきていたのか、とも思う。

AとCには、電車の趣味があつて、普通はお店として使っている木製の屋根つき台を電車にみたくて、メーターやハンドルを紙で作つて台におき、イスに座つて運転を楽しむ姿があつた。自動券売機を箱で作つたり、定期や切符を作り駅員さんにもなつていた。Bは自分もやりたいが、物がそろつてもどうやっていいかわからない。自分なり

に楽しむことが苦手で、AやCがそれなりになりきつてしていると、邪魔をしようところがあつた。そんなBの態度がAやCには我慢ができず、除外するようになつていった。

この頃クラス内でもBは孤立していた。電車ごっこも、担任の目にはマンネリ化して見え、何か一工夫ないかしらと思ひ、人を乗せられて、しかも動く電車を作つたら、もっと彼らのしていることが回りの子ども達にもよくわかるのではないかと、そこから交流ができ、活性化していくのではないかということで電車づくりを始めた。冷蔵庫



が入っていたような大きいダンボールを二つ使い、一車輛になるようにつなげ、窓をくり抜いたり彼らのイメージの地下鉄の色を塗ってみた。Aは早速、ワイパーをつける、ドアもあくようにしたいと言い、何とか実現させていく。AやCは自分たちで楽しめる場所があり、ダンボールのわくの中にイスを並べるものの、お客がいなくても運転手になりきっている。担任は、年中児などが乗りがっているのを知っていたので、イスをよけ実際に廊下を走ることを勧める。大勢ではないが、お客が乗り降りするようになった頃、Bが切符を配り始めた。そして、「切符ってパチンって切るよね」と言ってから、一穴パンチを出してきただのである。切符係として自分から参加したBに、担任は嬉しくなり、AやCも再び一緒にいるようになった。

さて現在年少組の担任をしていて、気になる

遊びは、電車やバスの運転手さんごっこ。プラフォーミングという柔らかい素材でできた小型積木で、運転席を作る。たいていタイヤのないトラックのように長短二個の積木を重ね、低い方にまたがって座り、高い方にハンドル（積み木だったりブロックだったりする）を置いて、アナウンスしながらハンドルを動かしている。プラフォーミングやイスを長くつなげて座席を設け、しきりに「乗って下さい」とアナウンスしている。この遊びが始まった頃、「何行きですか」と担任が聞き、行先を紙に書いて貼るようにしていたが、今は自分たちから「○○行きて書いて」と言っている。また、そこに着いたらしく「今度は○○行きて書いて」と言ってくる。

「乗っていいよ」や「先生、乗ってよ」の誘いはなるべく応じたいと思いつつ、他の要求におされてしまうことが多くなる。乗れないまでも「○

○君のバスが発するそうです」「○○に行きたい方はお乗り下さい」など、子どもの声よりは目立つ声を発し、一人でも乗客になってくれる子がいることを願っている。

ある時は担任と六人位の子どもが乗りこみ、バスの中で歌ったりお菓子を配りっこしたり果ては列をなして遊戯室まで行き、一遊びして戻る、という数十分の動きをしたが、バスの運転手になりきっていた男児の気持ちにはそぐわない流れを担任が作っていたのではないか、との思いが残る。

乗客として保育室内でプラフォーミングの座席に座っている間は運転手と乗客という関係の中で動いていたものの、席を立った瞬間から、その男児は、運転手でいたいのに、という気持ちが残ったかもしれない。

この運転手さんごっこは、三カ月くらい続いている。形を作り、行先を書いて貼り、それぞれに

運転したりアナウンスする運転手さんごっこ。今後どう展開するだろうか。子どもから動き出すのか、担任が動くか。ただ今のところ、どうしようか、という考えが出てこないのも事実である。

どう在るべきか。担任として、どうことばをかけ、接していくことが、子どもの主体性をのばし人間性を豊かにしていくのか。保育中忙しいのは事実であるが、何に對し忙しく動いているのか、ちよつと立ち止まってみるのも必要な自分の保育かもしれない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 編集後記

私が「ある日の育児日記から」はこの三月で終わりよ。佐藤さんちの有ちゃんも小学生になるの」といふと、毎回このページを「有ちゃん・圭ちゃん」と呼んで親しんできたわが家の二人の子は、早速、お気に入りのフレーズの載っている号を探し出してきました。

「はいけい、じかますますごせいえいのことと……」ひらがなでよんで（83回）「もうっ、いちどにひとりずつ話せ！お母さんは千手観音じゃな～い」それをいうなら聖徳太子だろ（67回）「いま、揚げものしてるからね「おかあさん」って呼ばないでね！」ちよっとおくさ

ん（52回）と次々に読み上げます。そのうちに、「有ちゃんはいっ生まれたんだらう」の疑問を解くために廻り「けいちゃんち、赤ちゃんが生まれたの」「お名前は」「おとうと！」（18回）を見つけました。

やがて、「それはお酒を凍らせたものだ」「はどこにあるのだろうと、私は漫画を見ていくのですが見つかりません。ところが二人は、文章の方を探しています。そしてそれが、寝る前にアイスクリームを「食べた」といった娘に向けて発せられた父親の一言だったという文章（68回）にたどり着きました。

このとき、私は、漫画だけでなく文章の方からお気に入りのフレーズが生まれるほど、わが家の子どもたちがこのページを愛読していたことを実感しました。

(A)

## 幼児の教育

第九十八巻 第三号

(一九九九年三月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二

株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―六六二三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレイ

ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

# 子どもが見える、保育が見える

ひらめの会 編著

編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

発売中

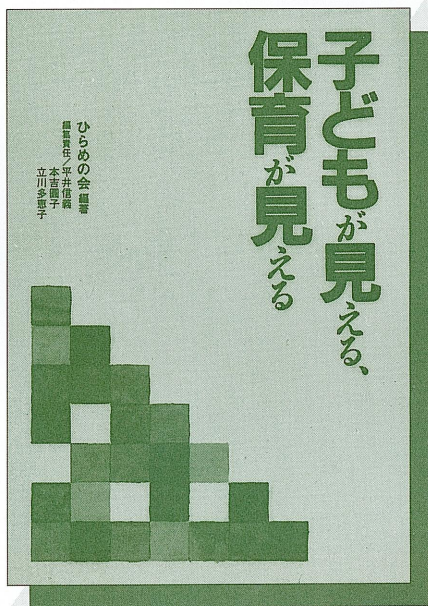
## 保育に花を咲かせましょう

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったと感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。

## ◆好評既刊本！



A5判 288頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 豊かな心を育てるフレーベル館の月刊絵本

絵本からたくさんの発見、驚きや話し合いが生まれるように編集しています。  
 幼児の発達や保育のねらいに合わせてお選びください。

## 総合生活絵本

季節、生活、お話、歌のページなど、  
 月々の多彩な保育活動に合わせて  
 構成されています。

### キンダーブック①

定価350円(本体333円)

やさしさにあふれた誌面を  
 通して、豊かな情操を育む  
 年少児向け絵本。



### キンダーブック②

定価400円(本体381円)

絵本を開く楽しみを通して、  
 感動や好奇心を引き出す  
 年中・年少児向け絵本。



### キンダーブック③

定価410円(本体390円)

自然や社会観察を通して、  
 実体験への活動を生む  
 年長・年中児向け絵本。



## 総合学習絵本

ことば、文学、数量を中心に、さらに  
 自然・科学、社会を加え、  
 総合的に知的好奇心を引き出すよう  
 構成されています。

### がくしゅうおおぞら

定価420円(本体400円)

ことば、文字、数量などの  
 基礎を育て、考える力がつく  
 年長児向け総合学習絵本。



## 科学絵本

本誌の特色であるリアルな絵、迫力ある写真で、  
 身近な自然の不思議と驚異を感動的に伝えます。

### しぜん-キンダーブック

定価460円(本体438円)

自然の不思議・驚異を通して、  
 科学する心を育てる  
 年長・年中児向け科学絵本。



## お話絵本

子どもたちを夢中にさせる多彩なお話を、  
 毎月精選してお届けします。

### ころころえほん

定価350円(本体333円)

楽しい会話が生まれる  
 年少児向け  
 スキンシップ絵本。



### キンダーメルヘン

定価350円(本体333円)

ファンタジー、冒険、夢などさまざ  
 まなタイプの物語の楽しさが味わえる  
 年中・年少児向け絵本。



### キンダーおはなしえほん

定価370円(本体352円)

“おもいやり”をテーマに  
 やさしい心を育む  
 年長・年中児向け絵本。



### おはなしえほんベストセクション

定価330円(本体314円)

フレーベル館のおはなしえほんの  
 ロングセラーを、精選してお届け  
 します。年長・年中児向け絵本。



キンダーブックの  
**フレーベル館**